

くじら日記

太地町立博物館から



クジラの学術研究拠点として環境整備が進められる「森浦湾くじらの海」に、2019（令和元）年に迷い込んだ「スバル」。父系がバンドウイルカ、母系がミナミハンドウイルカのハーフの雄です。その稀有な生い立ちから計画された研究テーマに学術的意義が認められ、2020（令和2）年から飼育研究を開始しました。

バンドウイルカとミナミハンドウイルカは、マイルカ科ハンドウイルカ属です。世界中の温帯から熱帯にかけて広く分布し、姿形や生態に地域差が大きいことから、過去には20種以上もいるのではないかと考えられてきましたが、長い議論の末、形態学や遺伝学研究の成果から、一般的には現在、この2種が認められています。

通常、異種間では交尾しないか、交尾しても子供が誕生します。

鯨類の繁殖⑤



「スバル」の子供。ハンドウイルカ属雑種
第2代となる=太地町立くじらの博物館

ハーフのスバルはハンドウイルカ属雑種第1代で、その研究の柱の一つに「繁殖」があります。雑種第1代ではどうなのでしょうか。

まずは、スバルの性状態を調査することから始めました。2021（令和3）年5月、月1回の血液検査で、性ホルモン値の上昇がみられ、体内での精子の正常な発育が期待できました。早速、出産・育児経験がある雌の「バンドウイルカ」「さくら」と「レダ」をスバルと同じブールに移し、交尾できる環境を整えました。

すると、スバルは性器を体外に出し、それを餌に向けるなど、発情行動が頻繁に見られるようになりました。しかし、雌2頭との相性はあまり良くなく、不安もありました。夏が過ぎたころ、定期的な検査から、さくらとレダの妊娠を知りました。無事に交

尾に至ったようです。今年8月、さくらとレダは臨月を迎えました。出産が始まつたのはさくらからですが、破水から出産まで時間がかかったうえに逆子で産まれ、残念ながら当日中に死亡してしまいました。続くレダは幸い、正常に出産し、さくらも育児に加わったことで、安心しました。赤ちゃんは、今もすくすく成長しています。

赤ちゃんはやがて大きくなり、子を授かり、その子供もまた新たな命をほぐむと思われます。この命の連鎖が、赤ちゃんと一緒に、種の適正な管理に役立つときが来るかもしれません。

赤ちゃんはやがて大きくなり、子を授かり、その子供もまた新たな命をほぐむと思われます。この命の連鎖が、赤ちゃんと一緒に、種の適正な管理に役立つときが来るかもしれません。

(太地町立くじらの博物館
館長 稲森大樹)

原則、第1日曜日に掲載します。

子宝に恵まれた雑種第1代